

ゲーテにおける教養の問題

—— ヴィルヘルムの場合 ——

大 沢 峯 雄

序

『パルツイヴァル』から『ヴィルヘルム・マイスター』に至る一聯のドイツ教養小説の主人公たちが辿つたその内的自己形成のダイナミックな創造過程を跡附けて行くと、そこに我々は、それぞれの時代思潮の影響の下に作者が一定の人間教養の理想像を意識していることを知るのである。中世騎士時代におけるパルツイヴァルの魂の成長を培うものは騎士道の掟と人間的感情の相剋から生れる苦悩である。この両者の調和の中に初めて、神に絶望した彼が再び神に帰一する契機が含まれている。そしてこの人間として騎士としての自己完成の後に彼が到達した境地がキリスト教界の支配者、聖杯王であつた。三十年戦役の戦場となつた十七世紀ドイツにおいては絶望的な孤独と無常の意識から彼岸における魂の救済を求め、しかも求められざる懷疑と矛盾がパロディックな人間の相である。彼にとつては短い地上の存在に対する永生、報を願わぬ神との結合、一切の他物が依存する究極の核心たる良心と信仰が問題の中心となる。しかしここでも重要なのは罪を犯さぬことではなくて、罪を通して魂が浄化されて行く過程である。一切はこの苦しみに満ちた精進にかかつており、空虚にして無味乾燥な日常生活に拘泥してしまふことを唾棄すべきである。

ジンプリツィシムスの放埒無慚な生活がやがて救済に至る道程も正しくこれであつた。ヴィーラントは『アーガトン』において同名の主人公をギリシヤの古代に移して、哲學的思索の基盤の上に人生の心理的・道徳的分析を企てる。舞台はギリシヤであるが、手法は完全に啓蒙主義時代のロココ趣味に支配されていた。現実を離れた宗教的狂熱は廃棄されて、カントの意味における義務の觀念が主人公の性格を形成する。そして彼の到達する境地は結局、精神と肉体、現実と理念を結合する調和的人間性であつた。

この人間性の理想を確認し深化したのが、W・フォン・フンボルト、ヘルダー、ゲーテ、シラーなど次代の新人文主義の詩人たちである。そしてゲーテが「各人はそれ自身個体たるにすぎず、また本来個体的なものにしか関心を持ち得ない。……我々の愛するものは個体的なものだけである。」(『ゴッヤ「祝祭版ゲーテ全集」第十六卷「個性の意義」])という生の自己価値、教養の根本価値を彼らは古代芸術の不滅の模範の中に、古代人生觀の全体性の中に求めようとする。彼らの人間觀の基礎をなすものは、ギリシヤに實現された内的諸力の調和的完成であつた。ゲーテも「ギリシヤ・ローマ文学の研究が常に高度の教養の基盤とならんこと」を願ひ(『前掲書第十四卷「前掲書第十四卷」(「疑言と省察」)、「かの古代の模範を、それによつて自らを形成せんと」の意図を以て真剣に眺める時、初めて本当に人間になるような感じ)を抱くのである(同上)。しかしこの人間内部における調和的・美的完成というギリシヤ的な普遍的人間性理想は、ゲーテの場合ヴァイマルにおける政治的・實際活動の體驗に促されて、やがて内部と外部、人間と世界、個人と社会との調和に發する内的自由という形で現れて来る。嗜好と義務との、主觀の要求と社会の要求との葛藤を調和することが古典主義ゲーテの人生目標となる。シラーがギリシヤ的教養理想と近代倫理觀の上に打ち立てた美的人間もそれを社会的統一を構成する有機的細胞として見るべきなかつた。その意味でゲーテの人間理想像はシラーのそれを更に一步進めるものであつた。今やヴェルテルのシュトゥルム・ウント・ドラング人は平靜な古典的人間に、個人主義的人間は社会人に、空想人は現實人に教育されねば

ならぬ。この生成の過程を『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代』の主人公に跡附けようとするのがこの小論の試みである。

『徒弟時代』前半におけるヴィルヘルムの生活はファウスト的な「暗き衝動」からする世界との漠然たる対決である。世界を己れのうちに包摂しそれを世界にまで押し拵げようとするこの衝動は無限への憧憬であり、普遍的自己教養への願望である。彼が「自分自身をあるがままに完成すること、これが若き日以来私がぼんやりと抱いていた願望であり意図であつた。」(前掲書第十一卷『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代』第五卷第三卷)と云う時、我々は彼の教養目標が社会と絶縁された自分一個の完成以外の何物でもないことを知る。彼の性格は何物にも規定せられない、いや一切の規定に対する反抗こそ彼の本質に属する。今この彼の傾向を市民的職業に対する彼の態度の中に見てみよう。市民的職業は個人と社会を結合する最も手近な規定だからである。十八世紀末期から十九世紀にかけて急激に勃興して来る機械工業の発達が必然的に要求する分業の必要に対しても当時のドイツ知識階級はまだこの趨勢に順応することができなかつた。職業は自由の侵犯、天翔ける思想の妨害、感情の阻止、人格の美の損傷と見なされる。結局彼らにとつては社会の進展に眼を背けて利己主義の殻に閉じ籠るか、哲學的瞑想に耽けるかするより外に道がない。ヴェルテル的耽美的人間の一人である前半のヴィルヘルムが職業を蔑視するのは当然である。彼が商家の子弟であることは彼をそこから背かせる拍車となるにすぎない。そもそも市民自体彼の眼から見れば「君は何を持つているか。どんな見識を、どんな知識を、どんな能力を、どれだけの財産を持つているか。」(上同)とだけしか訊ね得ない人間であり、「ある一つの方法で役に立つ人間になるためにほかの一切を疎かにせねばならぬ」(上同)人間である。かかる認識の上に立つてはヴィルヘルムの教養は

多くの人間との接触の中にあつても社会意識、職業意識に目覚めては来ない。我々はまだ彼が漠とした普遍的教養を
目指す段階に止つてゐることを知るのである。

ヴィルヘルムは己れの普遍的教養の場として演劇を選んだ。調和的美を求める彼が己れの生命を託する場所として
芸術を選んだことは十分首肯される所であるが、彼の演劇熱には偏狭な市民生活に対する反抗的意欲もあつて、そこ
には眞の芸術家が体験する現実との血みどろな生死を賭する闘争がない。彼における現実とは假象と空想の世界であ
る。彼が俳優として座付作者として収めた数々の成功にも拘らず己れの周囲に起る煩瑣な不快事に直面して苦もなく
打ちのめされるのは、演劇芸術の中に人生と世界を創造せんとする逞しい意欲を欠くからである。しかし既にここに
彼の絶望とそこから蘇る新生ヴィルヘルムが準備されてゐるのである。そもそも彼を劇界へ導いた動機は、舞台の上で
は人生の凡ゆるシチュエーションに身を置き、凡ゆる種類の人物に扮してその思想と感情に生き、人類に頌ち与えら
れてゐる一切のものを享受し得るといふにあつた。「生来拒まれてゐる自分の天性の調和的完成に抑え難い傾愛を抱
いてゐる」(同上) 彼が「自分自身を思ひのままに動かし磨き上げることのできる唯一のエレメント」(同上) は舞台を措い
て外にない。しかし彼は無限を求める憧憬のままに舞台の上で假の人物を演ずることはできたが、遂にその人物に生
きることを知らなかつた。そしてやがてヤルノーから俳優としての天賦の欠除を指摘されることになるのである。彼
にとつて「舞台は世界を意味する」(シラーの詩) (友に與う) だけであつて世界そのものではない。彼は演劇が己れの目的の手段で
あることを知つて、演劇それ自体が目的たるべきことを知らぬ。ここに彼のディレッタント的性格がある。ここに彼
が實際舞台で成功し、また不断の努力と研究によつて戯曲の解釈の点では卓抜な眼識を持つてゐるにも拘らず、観衆
の無理解と俳優の腐敗に対する絶望に屈せねばならなかつた契機が含まれてゐる。彼は己れの演劇熱の本質を理解し
ない。そしてこの理解に達する時、演劇という假象の世界に青春の一切を賭したことに對する後悔と幻滅に身を苛ま

れるのである。

しかし、ヴィルヘルムは劇団生活の中に何と豊かな経験を積んだことであろう。彼の素朴柔軟な魂は周囲の種々雑多な人物や環境に、或は順応し或は反撓しながら成長する。そしてこの教養要素と彼の魂との対決の中に生れるものが、彼自身に意識されると否とに拘らず、彼の人間構築の建築石材となつて積み重ねられて行くのである。今教養小説『徒弟時代』の中に準備せられたこれらの教養要素を仔細に観察する時、我々は前半において既に後半における主人公転回のモティーフが蔵されていて、それが彼の普遍的教養行路に制動的役割を果していることに氣附くのである。これらは転回の必要をヴィルヘルムに明確に意識させるものではないが、彼の成長にとつて不可欠の重要性を持つのである。

先ず第一巻第十章に「この商業の弁明アポロギは素晴らしく、且偉大な精神で書かれている。」とシラーに云わせた(一七九四年十二月)

九日グーテ、ヴィルヘルムを前にしての彼の友人たる商人ヴェルナーの商業礼讃がある。「君が我々の仕事に眞の趣味を持つていさえすれば、この仕事をしていても精神の数々の能力が自由に働くことができるということを確認するだろう。……人間に關することなら何にでも心から興味を持つ君が、勇ましい事業に伴う幸福が眼の前で人々に授けられるのを見たら、何という見ものだと思うだろう。」と熱を帯びてヴィルヘルムに説くのであるが、彼は人それぞれ一番良いと思つている事に兎や角口出しするには当たらない、と至つて冷淡である。俳優メリナが自分の体験から劇団や俳優の腐敗墮落を口を極めて罵つても、ヴィルヘルムの現在の段階からすれば、それは客観的な事実としてではなく単にメリナ自身の主観的偏見としてしか意識に上らない。「気の毒なメリナ、みじめなのは君の地位にあるのではなく、君の中にある。君はそれを克服できないのだ」(第一巻第十四章)。かかるモティーフはヴィルヘルムに未知と経験、理想と現実、狭い世界と広い世界の矛盾対立を感じさせるに十分であるべき筈であるが、演劇に夢中になつてゐる今の彼は

そこから何の懷疑も引き出すことができない。再度姿を現す不思議な人物と交わす運命と必然の議論も、自己の才能を恃んで自主独往せんとするファウスト的衝動人の段階にある今の彼には結局水かけ論とならざるを得ない。彼の教養過程に対して制動的役割をなすべきこれらのモティーフは今の彼には理解も納得もできず、その後彼の念頭から忘れ去られたように見える。しかしそれは彼の意識の底に重く沈み無意識の潜勢力となつて彼の魂を導く目に見えぬ道標となるのである。後日「あの仲間と暮らしていた頃のことを思うと無限の空虚を覗き込む思いがする。何一つ後に残っていない。」と告白するヴィルヘルムに「塔の結社」の一人は、「それは違う。我々が遭遇する一切のものは痕跡を残すものだ。一切のものは不知不識のうちに我々の教養に役立つのだ。」(第七卷 第一章)と答えているが、まことに我々が出会する一切は生物と云わず無生物と云わず我々の人間生成の素材をなすと云えるであらう。さてヴィルヘルムの中に徐々に蓄えられて行く制動力はやがて第三の謎の人物の、「ハムレット」上演の夜における「逃げよ。若者よ。逃げよ。」という最後の警告によつて爆發して彼の生活に急転回をもたらしことになるのである。

次に、重要な契機として、第六卷『美しき魂の告白』がある。これは高次の精神層への移行を用意する休止点である。思えばここに至るヴィルヘルムの生活は外的な權威を無視し己れのゲーニウスを信じつつ運命の導きに身を任せ、来た幾変転の生活であつた。それは己れの才能に全的な信頼をよせながら他の一切を顧みぬてのいわば僭越倨傲の態度である。彼は本来善良この上もない人間であるだけに、この態度は神を嘲罵するプロメーテイス的反抗としては現われなかつたが、この善良性の底にひそむ強靱な力は行手を阻むものに真向から食つてかかる不屈の鬪魂を蔵している。彼の生活の指標はプロメーテイスと同じく我がうちなる「聖に燃ゆる心」(ロメーテの詩)であり、「それを持つ者は雨にも嵐にもひるまぬ」(同上「旅人」の嵐の歌)ゲーニウスであつた。人はこれまで彼が宗教について全く無関心であつたことを思うべきである。しかし今や決定的な転回を前にして彼はそれまでの無目標な摸索と錯迷から自己に立ち帰り

自己を凝視する瞬間を持たねばならぬ。次々に起る身辺の不幸に直面し己れの教養道への懷疑が十分に成熟した今にして初めて、彼は宗教的体験を理解する心境に立ち至る。前後の脈絡もなく唐突に挿入されているように見えるこの独立した一章は、ヴィルヘルムの魂が再起を前に重要な教養要素の一つたる宗教の洗礼を受け、外に向けられていた眼をここで一旦内に引き戻す意味で、教養小説としてこの作品を眺める時最も重要な章の一つと見るべきである。偶像崇拜的教会的既成宗教に慊らず無神論者と嘲られながら歯を食いしばつて神を求めたゲーテ自身を思うとき、彼の教養過程における宗教の役割がいかに大きかつたかは自ら明らかであるが、この敬虔主義的色彩の濃い『美しき魂の告白』は若きゲーテの神を求める苦しみ多き努力の衰れにも美しい記念碑となつた。しかしヴィルヘルムの教養という観点に立つ時、この『告白』の中にひそむ作者の用意を見逃してはならぬ。即ち『告白』の女主人公の宗教的自己教養は積極性と創造性を欠き、自らを社会の外に見る宗教的自己慰安であつた。社会から遊離した一個人と神との合体に満足と喜びを見出そうとする一種の宗教的エゴイズムである。信仰心は外に向けられて初めてその本来の働きを現す。我ひとり神のものとして無気力にそこに安住する境地はファウストの唾棄する「懶惰の臥処」との差いくばくもない。いわば利己主義的な宗教的増上慢と云えよう。さればこそゲーテはこの主人公に「医師」と「叔父」を対置して、「活動的なことが人間第一の使命」であり、「止むなく憩うべき時も外物の明確な認識の獲得に力むべきであり、この認識が更に人間の活動を容易にする。」と云わせる。また「人間において最も尊敬に価するものは決意と結果」であり、「人間を知るための先ず第一の質問は、汝何を以て業となすや。」である。ゲーテ自身に云わせれば「己れ自身を知るための手段は観察ではなく行為であり、自らの義務の履行である」（『音楽と。かくて』告白）はヴィルヘルムにとつて二重の意味を持つて来る。即ち彼はこれによつて一旦自己を凝視すると共に、そのままの状態に満足せずしてこの体験を経て新しい行の世界へ出て行く勇氣を与えられる。従前の生活を「無限の空虚」と見る彼の眼前に

いよいよ新しい活動の舞台が開けて来るのである。

更にヴィルヘルムの散漫な放浪の中にあつて演劇人の腐敗と悪徳から常に彼の純情と善良を守つてくれたものにミニオンと堅琴弾きがある。この二人は彼の教養理想の決定的転回に積極的役割を果すものではないが、この転回を可能にする大きな力となる。彼の持つ純真と善良、これこそ一旦己の進むべき道が邪道であることを悟るや、決然とそれを振り捨てる勇猛心の原動力となるものである。この本来性を彼が劇団人の營利追求と私慾の中にあつて最後まで守り続けることのできた影の力となつたものが実にミニオンと堅琴弾きである。ミニオンの傍にいる時彼は自己本来の姿に立ち帰る。第二巻末尾の純な二つの魂の交驩は何と読む者の胸を衝つことであろう。我々はミニオンある限りヴィルヘルムの魂は永久に汚されることなきを確信するのである。また堅琴弾きと彼の奏で出す哀愁極まりない歌の数々は、ヴィルヘルムの魂が周囲の汚濁にまみれんとする危険な瀬戸際にそれを救い出す神の力であつた。まことにこの二人はヴィルヘルムの魂の憧憬であり故郷であつた。或はヴィルヘルムの魂の中に二人の故郷があるのであるか。

最後に「塔の結社」の一人ヤルノーがいる。ヴィルヘルムの目を猿芝居から背けて沙翁の世界へ向けたのはこの男であり、漸く転向の機熟して来た彼に辛辣骨をさす言葉で迫るのもこの男である。愛する一座の仲間を嘲罵するヤルノーをその冷酷さの故に非難しながらも、ヴィルヘルムは遂に彼の影響を逃れることができない。そしてやがては彼によつて「塔の結社」に引き入れられることになるのである。

かくてヴィルヘルムが演劇を媒介として身につけようとする普遍的美的教養の道は以上の如き種々の抑制的動機との無意識な折衝のうちに進んできた。しかしやがて彼の人間教養は高度の段階に到達することになる。今や彼の教養は遊離した個人の域を脱して社会という観点に立つことになるが、そのためには彼は全く新しい環境要素と対決せね

ばならなかつたのである。

こうしてヴィルヘルムの生成の道は前進と抑制、満潮と干潮との相反的リズムの中に進んで来た。しかも当のヴィルヘルムはこの相反の中に毬の如く弄ばれながら、しかもそれが彼の意識の外で行われていたが故に彼は一定の教養段階に達するまではそれに身を切る苦悩と懷疑を感じないのである。読者の心をゆすぶるヴィルヘルムの悲劇性は実にここにあるのではなからうか。

二

さて『告白』を境としてヴィルヘルムの運命の方向を決定するものは『告白』中の叔父の言葉である。今漸くその言葉の意味を理解できる段階に到達した彼にとつて、これまでの生活は「無限の空虚」である。「悲しいことに私がお話できることと云えば、誤りに次ぐ誤り、迷いに次ぐ迷いだけだ。」(第七卷)と告白し、「どんな悲しい環境の変化にあつても内心の動揺を感じることのない」(同上)人間を羨望し、「自分を運命と調和させるために、自分の過去の全生涯を葬る必要のない人」(同上)を幸福と感ずるヴィルヘルムは地霊の一喝に我が身の虫けらにも等しきを悟つたファウストにも似て哀れであるが、この厳しい自己批判は彼が行動人として蘇生するためには是非とも通過せねばならぬ試練であつた。

しかし果してこれが迷いであつたらうか。結果的にはそうかも知れない。しかしそれは彼がその中にあつて生活する時迷いとして意識されるものではない。演劇はそれのみが自己の生命を託するに足り、そこにのみ自己教養の糧を見出し得る唯一の場であつた。彼は努力と真摯の一切をあげてそれに捧げる。この誠実にして純真無雑な努力こそヴィルヘルムの行動一切の基底をなすもので、そこに「努力する限り迷う」という迷いの真義がある。絶望と幻滅の深

滯に臨んで、彼を遂に虚無と自棄に陥らしめなかつたものも実に彼の善良な魂であり、「心から関心を寄せ得るものは人間的なものだけであり」(第十一卷)「人間にとつて最も興味あるものは人間」(第二卷)だと云う人間愛であつた。嘗て身を以て体験した貴族社会に対して、内心不満と反撥を感じながら、仲間が悪口雑言するのを聞いて「非難するなかれ。むしろ憐みをかけよ。」(第四章)とたしなめ、或は辛じて追剥の掠奪を免れた己れのトランクを一座の者に解放するヴィルヘルムの姿には一種荘嚴な気高ささえ感じられるではないか。彼はエゴイストではない。全篇を通じて彼の行動のどこを見てもエゴイズムの片鱗すらない。彼もまたバルツイヴァル、ジンブリチシムス、ハインリヒなどドイツ教養小説の主人公たち、いずれも暗き衝迫に駆られた良き人間たちと *tunpheit* (純朴愚直) を共有するもので、人を信じ易く人に欺かれ易い人間である。問題は彼の教養があくまで遊離した個人的人間の完成という段階に止つていて、社会を構成する有機的一員としての個人の意識を欠いていたということである。

今後半においてヴィルヘルムの面前に現れる「塔の結社」の人々はあの劇団人と何と趣きを異にすることであろう。その生活目標は自己を超越して社会に向けられる。彼らは一段と高い次元に住しながら、新生ヴィルヘルムにとつてグンドルフの云う「人間に具現された教養原理」となるのである。伝統と歴史のない国アメリカに懺らずして帰国し「ここにこそアメリカがある」と叫んで土地開拓に努力するロタリーオ、女としての優しさにロタリーオ的活動性を兼ねるテレゼ、『告白』の主人公の消極的敬虔性を積極的行動性に振り向けることを知つているナタリーエ、更に牧師、ヤルノーなど、周囲の実際的行動的環境の中にあつて彼に与えられる課題はこれまで見逃されていた眼前の「最も手近なことを行う」ことである。自己を放棄しなまの現実と折衝し實際活動に専心し、従来自己に規定されていた意志を現実に規定させるのである。自己中心の普遍的教養は今や行動する精神を最高のものとする一面的教養に代らねばならぬ。これまでの放漫な生活を局限して凡ての力を一つの目的に集中せねばならぬ。ゲーテが詩「自然と芸術」の中で

「局限の中に初めて巨匠が現れる。」と歌うその局限の持つ積極性こそゲーテがヴィルヘルムに到達させようとする認識であろう。事実ゲーテはやがてこの局限を諦念にまで拡充して『遍歴時代』の根本テーマとするのである。「塔の結社」の人々が次々に説いて聞かす「初めて世間へ出る人間が自ら貴しとして多くの長所を獲得せんと思ひ凡ゆることを可能にせんとする、それはいい。しかしある程度まで自分の教養ができたならば一層大きな集団の中に没入し、他人のために生き義務に叶つた活動の中に自分を忘れるようになるのが得策である。そこで初めて人間は自身自身を知る。というのは行動こそ我々を他人と比較させるからである。」(第七卷)とか「迷わせまいとするのが人間教育者の義務ではない。迷っているものを導くこと、いやその迷いを盃の底まで啜り尽くさせること、それが教師の知慧である。自分の迷いを味うだけの人はそれで長い間家を賄ひ、稀な幸福としてそれを喜ぶ。しかし自分の迷いを汲み尽くす人は氣狂いでない限り当然その迷いに通暁する筈だ。」(同上)などの言葉はヴィルヘルムを打ちのめす鉄槌となると共に、彼の未来を約束する希望の光であつたろう。これを聞いて彼は「この人が迷いと云つてゐるのは、これまでずつと私を追いかけて来たあの迷い、見つかる筈のない所で教養を求め、素質が少しもないのに一芸に通ずることができると已惚れていたあの迷いのことに外ならぬ。」(同上)と考える。こうして彼が再び本来の自己に歸つたのを機会に彼は「塔の結社」から修業証書を授与されるのであるが、同時にそれが、彼がフリーリックスを我が子と確認した事と関係するのは意味深い。即ち彼は後半において行動人、社会人の実例を数多く見せつけられ、またそうあるべきことを幾度か説かれたけれど、まだそれを実感として受け入れていない。今彼は我が子を確認することによつて父としての義務を負わされ身を以て次の世代との繋がりを意識させられる。『根元の言葉』の中で歌われる「強制」の世界である。超個人的意志の前に恣意が黙し、人間の意志が苛酷な必要に従わねばならぬ世界である。彼の恣意はここに明確に大きな制動を加えられた。正にヴィルヘルム再誕の日と云うべきである。

こうして彼は「すべての人間が人類をなす。」という修業証書の言葉を身を以て体験し、社会の有機的一員としての自己を意識して社会的感情を培わねばならぬ。この社会人類との一体感、即ち市民としての自覚の中に真の調和、真の人間性に到達する契機が含まれるのである。これが内的自由の境地、『根元の言葉』の中に歌われる「希望」の世界であろう。しかしそのためには個人は社会的法則による制約と己れの願望とを一致させることが必要であろう。

『美しき魂の告白』の主人公はこの両者の相剋を意識しなかつた。今ゲーテはその姪に当るナターリエにおいて、義務と願望、法則と自由、社会と個人が完全に一致する人間性の理想像を創造してヴィルヘルムの面前につきつけた。

『告白』の主人公フュリスは「自分勝手な己惚と排他的な偏狭を嫌う」叔父の「ただ一人己れ自身に閉じ籠つて道徳的修養に耽るのとはよくない。」と云う言葉によつて見事に盲点を衝かれたが、シラーもフュリスとナターリエを對比して「ナターリエは神聖であると同時に人間的であるからこそ天使のように見えるがフュリスは単に聖女にすぎぬ。」(「一七九六年七月三
日」ゲーテ宛書簡)と云つている。『告白』の中でフュリスが少女時代のナターリエに感心する万人への愛が長ずるに及んで子女の教育という社会的慈善事業へと導かれる。ナターリエから見ればフュリスは「身体が虚弱で自分のことに耽りすぎ、その上道徳的宗教的神経質のためにこの世界に対して、事情が違えばなり得る筈のものになれなかつた。ほんの僅かの人々、特に私だけしか照さなかつた光」(第八卷
第三章)であり、「自分をあまりに濃やかにあまりに良心的に作り上げ、いわば自分を作り上げすぎた (sich überbilden) ために、この世界には何の寛容も宥恕も存在しないと
思う」(同)美しき本性である。年齢身分を問わず凡ゆる人間に欠乏と必要を発見することにナターリエの眼は自然によつて定められていて、そういう物の見方は彼女にとつて毫も反省を交えない極めて自然なものである。関心の一切はあげて人間に向けられる。生命のない自然の美しさの如き何の作用も及ぼさない。彼女は愛そのものである。社会の中に融け込んで万人を愛するが故に特定の個人を愛することがない。ヴィルヘルムの問に答えて「一度も愛したこ

とがない。と云つて悪ければいつでも愛している」(第八卷 第四章) という言葉は最も率直に自らの愛の本質を明らかにする。「彼女は愛がその本性であり永久的な性格であるから、情愛として、排他的なものの特異的なものとしての愛を全く知らぬ」(前掲書) のである。かくてナターリエは全人類の歓喜の対象として「美しき魂」の称号をフェリスから移されるのである。

しかし今のヴァイルヘルムは今までとは全然別種の環境に順応し、剩えミニヨンと堅琴弾きの急死による感情の混乱を整理するのに忙しく新しい教養要素に積極的に反応を示す心の余裕がない。彼にはキスの子ザウルが父の驢馬を探しに行つて発見した王国の価値も十分理解できず、その値打ちもないのに何物にも代え難い幸福を得たことを喜ぶのが精々である(最後)。彼が新しい教養要素との対決から導き出す結論、「汝の努力は愛の中にあれ。汝の生は行為であれ。」(「遍歴時代」第三卷第一章) をモットーとする有為な市民としての思索と行動の展開は続篇『遍歴時代』に課せられる課題となるのである。

兎も角ヴァイルヘルムはやがて、自分がそこから逃避して来た市民生活の中へ神秘的な手の導きにより再び帰つて行くのであるが、ここで問題は、小説の冒頭ヴェルナーの勧誘のままに市民生活に安住したであろう彼と長い放浪の後に市民生活に到達する彼との間の教養的距離であろう。これは人生体験と人間生成との問題でもあり、また芸術と人生との問題でもある。彼にして見ればあの放浪と錯迷の後なればこそ市民生活に戻ることができるのであり、拡散された豊富な普遍的教養こそ積極的創造の意味における局限を可能にするのである。一方また彼が演劇を通して身につけた美的体験は市民生活の中に止揚せられてそれに豊かな内面的調和を与えることになる。この人生に対する普遍的美的把握の深度が直ちに教養的市民と俗物的市民との相違となつて現れて来る。シラーが一七九六年七月八日にゲーテに宛てた有名な書簡の中で「ヴァイルヘルムは不明確なうつろな理想から明確な理想の中へ入つて行く。しかしその際

美化する力を失うことがない。」と云っているのもこの意味に解していいであろう。

—一九五二・四・二七—

(この小論の一部は要約して昨年春の日本独文学会総会と同会機関誌『ドイツ文学』第六号に発表したものであることをお断りしておく。)